

教育の現状に対する教師の認識 態度について

—— 差異的研究 (その二) ——

野 村 昭

§1. 問 題

先に我々は、新教育理念に対して、教師が、如何なる態度を持しているかを差異的に見て来て、その地域的背景（地域差）、時代的背景（年令差）、性的背景（性差）等に依て、その把握の仕方、在り方に、若干の相違の存することを指摘したが、^{*}之等は現在の教育の実態、更に精しく云うならば、教師が教育の場の現況を、どの様に認識し、それにどう対処しなければならぬと考えているか。亦は処しているか。即ち、その現状認識態度・意見と根本的に繋つている。と云うのは、新教育理念に向つて進むのに現況の道程はどの様に困難であるか。またその認識の上に立つて新教育理念をどの様に生かして行くべきか、と云うことと関連なき理念は単に画餅であり、徒らに現状との背離を嘆かしめるのみの袋小路に教師を追やることになる。

現在の教師の悩みや訴えは、この理念と現実の両面に向けられた態度の中にこそ存するのであり、かゝる意味から云つて教育の実態を明らかにせむが為の第二報告として、教師の「現状に対する認識」態度をこゝで取上げる。

(別表) 教育の現状について

◎ 現在教育の実際はどうですか

+5	+4	+3	+2	+1	0	-1	-2	-3	-4	-5
勿論 様 こた へ		肯 定			肯 定 も せ ず			否 定		決 て し ん は な い
		(肯 定)						(否 定)		

1. 父兄・教師の結びつきが建設的である。	12. しつけの面で徹底を欠き、教師が迷う。
2. 社会科学習の取扱いに困難を感じる。	13. 児童が利己的で勤労精神がない。
3. 指導が廻りくどいと批判をうけている。	14. 新教育に対する世論はよくなった。
4. 優秀児は伸びるが、遅滞児は救い難い。	15. 児童に発表力がついて来た。
5. 地域教育が全教科にわたりすぎている。	16. 男女同等に児童が活躍している。
6. 教育が上つ調子に流れている。	17. 児童の無責任な自由、わがままが多い。
7. 学校での事務・雑務が過重で、研究心がそがれる。	18. 児童の実力が正確に見分けにくい。
8. 教材、参考資料、設備等が予算の関係上不足している。	19. 子供達が明るく、のびのびとなつて来た。
9. 健康管理が不備である。	20. 児童、教師が一体となつて学習している。
10. 八方美人、事なかれ主義の教師が多く、教育信念に欠ける。	21. 児童の学習意欲が乏しい。
11. 自由放任の混乱状態が、漸くいい方向へ落つて来た。	22. 父兄が我子のことのみ重視して、他人のことを顧みない。
	23. 児童の素直さに欠ける。

* 教師の新教育理念に対する態度について。—差異的研究 (その一)—、

24. 教員の不足に依る時間数が多すぎる。
25. 道徳心が児童に乏しい。
26. 教員の研究心が不足している。
27. 生徒が華美で、落つきがない。
28. 個人指導が不徹底になつている。
29. 教育の理解浅く、父兄の協力を欠いている。
30. 戦前の教育に逆もどりしつつある。
31. 余りにも、アメリカ直輸入の教育が行われている。
32. 民主化を唱えながら、教師自身の民主化がなされてない。(男対女、校長対職員等)
33. 教科書依存の教育になつている。
34. カリキュラムや評価表作成に努力を用いすぎる。
35. 校長が形式的運営に満足している。
36. 児童の学力が低下している。
37. 女生徒が奥ゆかしさに欠ける。
38. 教師が常識に乏しい。
39. 放任して、愛の気持にかけた通り一辺の教育になりつつある。
40. 教育の為の教育になつている。
41. 家庭の指導が不十分である。
42. 社会は教師を特殊扱いして人間性を認めない。
43. 児童の物に対する感謝の念がうすい。
44. 山村の子は都会児とは、知識が遅れている。
45. 児童の仮名表現が稚拙である。
46. 児童の礼儀が乱れている。
47. 父兄が学校に任せつきりになつている。
48. 児童の理論的奥行が浅い。
49. 教師の態度が都会本位に傾いている。
50. 児童の当意即妙の処理能力がついた。
51. 教育方針の転換烈しく、教師が落つきを欠いている。
52. 教育者間に競争意識がある。(男対女、独身者対有配偶者等)
3. 教員に隋眠の風がある。
54. 教育二法案が出て、教師は不安である。
55. 女の先生の方が、近頃、教員としての適応性を示している。
56. 学的体系にまとまりがなく、教えにくい。
57. 日本固有の精神がないがしろにされている。
58. 児童の忍耐力が欠けている。
59. 教師の権威が失墜した。
60. 各教師のひとりよがりの教育が行なわれている。
61. 進学的教育と、義務教育に、ギャップがある。
62. 教育がその時の政府や権力に左右される風潮がある。
63. 免許状に依る差別待遇が大きい。
64. 教師の負担に比して、児童生徒に身が入らぬ。
66. P T Aの父兄の、学校内部への批判が多い。
67. 教育への熱意と、経済的考慮とのギャップに悩む。
68. 辺地教育が忘れられている。
69. 教育の中立性が、一部の極端なものにさらわれて、穏健な、まじめな声なき教師の姿が認められていない。
70. 教育が教師中心になり勝である。
71. 現在の教育は、人間を骨抜きにする。
72. 巾広く導くのに困難を感じる。
73. 個性教育、自由教育が骨抜きにされている。
74. 義務教育が長い為、父兄の負担が大きすぎる。
75. 漢字制限、新かなづかいに困難を感じる。
76. 教育の機会均等になつていない。
77. 技術に重点を置きすぎる。
78. 教育軽視の風潮がある。
79. 記憶問題が軽視されている。
80. 児童に、歴史的認識を知らせるのに困難を感じる。
81. 高校教育は、予備校化している。
82. 児童の自主性が乏しい。
83. 知的偏重教育に陥っている。
84. 児童は集団行動に欠ける。
85. 教師一般の考え方、センスが古い。
86. P T Aの運営が形式的である。
87. 児童が、精神の集中を出来ない。
88. 児童が生意気である。
89. 父兄が学業成績偏重である。

§ 2. 調 査

この調査は、先の第一報告と同一の対象、期日、手続き方法に依つて施行したものであるから、重複の個所は略述するととどめる。

(期日) 1954年 8 月

(対象) 島根県下のM市、O郡及び山間町のM町の小、中、高校の教員129名(内、男66、女

63. 年齢は20才から50才に及ぶ)を対象とした。

(手続き) 先づ〇郡に於ける自由回答に従つて別表[※]を作製した。(別表の項目配列は無作為)

次いで、之等の項目に対して十一[※]点尺度法を用い、三地域の教員に評価せしめた。尙、この際、別表に附記した態度を要請、教示した。

§3. 結 果

(調査分析) 別表の項目は、既述の如く〇郡の教員の提出した自由回答に基いて作製したものであるから、そこには教育の現状、及びそれに向けられた教師の眼のつけどころが伺われる。之等の項目を検討し、類化して考えるならば、大別して Tab. 1a, Tab. 1b[※]の如くなる。こ

Tab. 1. a

現実の教育の 全般的傾向 (a)	A 教師について	1. 教師と云う人間について (現在の教師像) (b)
		2. 教師の仕事について { I) 教科内容(c)及びその指導(d)について II) 勤務(校務)(e)について
	B 児童について	1. その知的生活 (学力、発表力等) (f) 2. その社会的生活 (集団訓練、躰等) (g)
	C 社会との関係 について	社会及び父兄との関係に於て (h)

(註) () 内の文字は、後に於ける分析の際の Table の略号に対応する。

Tab. 1. b 各項目整理分類表

領 域	項 目 番 号	項目数
a. 教育の全般的傾向について	6, 11, 20, 30, 31, 39, 40, 51, 54, 57, 61, 62, 64, 67, 68, 69, 71, 73, 74, 76, 77, 78, 81, 83	24
b. 教師像について	10, 26, 32, 35, 38, 49, 51, 52, 53, 54, 55, 59, 60, 63, 65, 67, 69, 70, 85	19
c. 教科内容について	2, 5, 56, 77, 79, 80	6
d. 指導について	3, 4, 12, 18, 28, 33, 39, 56, 70, 72, 75	11
e. 学校勤務について	7, 8, 9, 24, 34, 35	6
f. 児童の知的生活について	21, 36, 44, 45, 48, 50, 65, 87	8
g. 児童の社会的生活について	13, 15, 16, 17, 19, 23, 25, 27, 37, 43, 46, 58, 82, 84, 88	15
h. 对社会関係について (殊に父兄との関係に於て)	1, 14, 22, 29, 41, 42, 47, 66, 74, 86, 89	11

れに依れば、その殆んど全領域に亘つて問題が取上げられて居り、教育の現実が種々の側面から問題を投かけているのが望見出来る。

我々はこの諸問題の地域差、性差、年齢差等の差異性を明らかにする為に、この Table に従つて本調査の分析を為すことを意図した。

(全体傾向) 全調査者の平均尺度値の位置を見ることに依て、各項目の問題の程度が相対的に

* 〇郡に於ては、この項目中 (22), (89) の2項目は施行していない。

※※ 分析の関係上、何れにも明確に区分出来ぬ項目は何れか一方に偏さないで重複させた。之は自由記述の手續上止むを得ない。

は区々である。が、比較的各地域、性、年齢の差異に拘らず集中的に評価点が、与えられているのは、8, 71項目であり、現場に於ける教材、参考資料の不足、設備の不備は、何れの場所、場合を問わず深刻であることを訴えて居るが、亦一方、現実の教育を貫いている新教育理念を捨てることなく、それを育てゝ行かんとする傾きが見られる。

3) 更に Tab. 3 に於て、全般に意見の浮動の甚しいものは、77, 39, 75, 78 の諸項目であるが、之等を除いて、各地域差、性差、年齢差の、意見浮動への比重を考察して見ると、年齢別のみに差異の存するもの（分散度の大きなもの）が多いのは注目される。（S.D. 比較）亦このことは、C.V. の比較に於ても判然として居り、差異の度合は、年齢差が一番大きく、性差が一番少ない傾向が見られる。（年齢差 > 地域差 > 性差）之は年齢の要因が、他の地域、性等の因よりも、背景として、意見や問題や認識の持ち方に、より作用している様に暗示されるものと云えよう。尤も、この場合は高、低評価のみについて云えることであり、中間の各評価値に迄、徒らな臆測を重ねることは避けねばならないし、亦、各項の内容にも規定されるから、早断は許されないが。

このことに関しては、各差異性を考察する際に、より分析的に詳しく見て行きたい。

（地域差） M市, O郡, M町の三地区の、夫々の特殊性を見る為に、各地域の平均尺度値の比較を試みた。先づ、教育の現実に対する問題点とも云うべき点が、各地域に依つて若干異なる傾向が見られる。（Tab.4）

Tab. 4. 地 域 的 相 関

即ち、殊に山間の小さな町であるM町の場合は、他の二地方と比較して差異の存するのが瞥見出来る。而もその差は、「児童生活に関する問題点」と、その「指導について」特にこのことが明らかである。更に詳細に亙つて問題点を検討して行くと、Tab. 5 に示した様になり、教育の現実の諸々相に於ける在り様が看取される。この中、主な点を拾い上げて見ると、

a 教育全般について			b 教師像について		
	M 市	M 町		M 市	M 町
O 郡	+0.832	+0.683	O 郡	+0.755	+0.587
M 市	×	+0.774	M 市	×	+0.637
c 教科内容について			d 指導について		
	M 市	M 町		M 市	M 町
O 郡	+0.931	+0.879	O 郡	+0.749	+0.397
M 市	×	+0.928	M 市	×	+0.617
e 学校勤務について			f 児童の知的生活について		
	M 市	M 町		M 市	M 町
O 郡	+0.880	+0.952	O 郡	+0.737	+0.822
M 市	×	+0.852	M 市	×	+0.328
g 児童の社会的生活について			h 対社会関係について		
	M 市	M 町		M 市	M 町
O 郡	+0.777	+0.354	O 郡	+0.945	+0.818
M 市	×	+0.314	M 市	×	+0.608

a) 教育全般の傾向について

1) M市の傾向——辺地教育が等閑に附されているとの他地域の認識に対して、低い評価を

* ここでは集中度（分散度）を便宜的に S.D. が ±0.5 の範囲内に於て考えられるもので、C.V. の順位が上位にあるものを集中的、それ以上を分散度の大きなものとして取扱つた。

Tab. 5. 地域に依て差異性を示す項目尺度値
a 教育全般について

項 目	O 郡	M 市	M 町	項 目	O 郡	M 市	M 町
6 教育が上つ調子	+1.6**	+0.3	+0.3	20 児童教師一体学習	+1.9	+2.4	+0.9**
71 現在の教育は骨抜	-0.3**	-1.0	-1.0	62 教育の政治隸属	+3.0	+2.8	+2.2**
39 愛の欠如	+0.4**	-0.9	-0.2	81 高校教育予備校化	+2.3	+1.9	+1.0**
77 技術重視	+0.4**	-0.6	-1.3	31 アメリカ直輸入教育	+1.9	+1.3	-0.6**
78 教育軽視	+0.8**	-0.8	-1.4	40 教育の為の教育	+0.7	+0.2	-0.3**
83 知的偏重	+0.4**	-0.2	-0.3	51 教育方針の不同性	+2.2	+1.2	-0.4**
68 辺地教育等閑	+2.3	+1.1**	+2.8	64 教育組織の官僚性	+1.7	+1.4	-0.3**
74 義務教育過長	+0.2	+1.2**	+0.3	54 教育二法案不安	+1.8	+1.9	+2.6
30 戦前教育復古	+0.9	-0.3**	+0.9	76 教育の不機会均等	+2.0	+1.2	+0.8

(註) **印は、他地方と差異を示すと思われる尺度値 (以下同様)

与えて居るのは、現実の僻地の教員と都会の教員の辺地教育に対する認識度の相違を示すものとして地域的背景を如実に物語っている様に考えられる。

Ⅰ) O郡の傾向——全般的に云つて、他との比較に於てではあるが、現在の教育の傾向に満足出来ぬものが多く、問題とする度が高い。之は、同じ山間部とは云え、M町と対称的な色相を示している。

Ⅱ) M町の傾向——こゝに示された結果のみから云えば、他の二地方に比して、比較的問題点が少く、現実には円滑に動いている様に見える。之は、現実を評価する態度に甘さがあるのか、或は、小さな町の特殊性として、現実の阻礙が少ないのか、断定は出来ぬが、問題性の稀少、適応の無抵抗さは、逆に云うならば無為に安住した姿とも受取られぬことはなからう。

Tab. 5. b 教師像について

項 目	O 郡	M 市	M 町	項 目	O 郡	M 市	M 町
53 教員隋眠	+0.1	-0.6	0.0	32 非民主的	+2.5	+2.5	+0.8**
60 教師の一人よがり	+0.9**	-0.2	-0.3	55 女教師の適応性	+0.3	0.0	+1.0**
63 差別待遇	+0.8**	-0.4	-0.1	49 都会本位	+0.2	+0.9	-1.5**
70 教師中心教育	+1.2	+0.5	+2.1	51 教育方針の不同性	+2.2	+1.2	-0.4
52 競争意識	+0.5	-0.1**	+0.1	10 事なかれ主義	+2.1	+1.3	+2.9

Tab. 5. c 教科内容について

項 目	O 郡	M 市	M 町	項 目	O 郡	M 市	M 町
77 技術重視	+0.4**	-0.6	-1.3	5 地域教育の偏重	+0.2	+0.2	-1.2**

b) 現実の教師像について

Ⅰ) M市の傾向——殊に取上げて論ずべきものもないが、教師の態度として都会本位に傾いている(殊に転任等の場合)、都会に憧れている傾向が他の二地方より強く見られるのは、都会と農村との二重の背景を持つた地方小都市教員の周辺人としての悩みであり、不満であると云えないだろうか。亦、競争意識の少なさも、隋眠をむさぼるにしてもそれが出来ない刺戟の存

在等も、より都会的と云えよう。

Ⅱ) O郡の傾向——こゝに於ても不満が多く殊に教員の差別待遇に対する訴えや、教師のひとりよがりの教員を認めることが強い。之は反面、その地方に(山間部に)、かゝる教員が多いということでもあり、辺地教育軽視の訴えに、相関連するものではなからうか。

Ⅲ) M町の傾向——こゝでも問題点は一番少いが、M市とは対蹠的に、都会への憧れは少いことは教育の堅実さを物語るが、同時に亦、事なかれ主義が多いことと関連して、安きにつく教師の姿が見られる。

c) 教科内容について

之等の差異は少く、唯、M町のみが他地域に比して、地域教育の偏重を否定している傾向があるのが見られる。

Tab. 5. d 指導について

項 目	O 郡	M 市	M 町	項 目	O 郡	M 市	M 町
3 指導の廻りくどさ	-0.1	+0.4	+1.3	18 実力評価困難	+1.1	+0.7	-0.6※
39 愛の欠如	+0.4	-0.9	-0.2	12 躰の不徹底	+1.4	+1.2	+2.1※
75 漢字制限新かなづかい困難	+0.7	-0.2	-1.7	28 個人指導の不徹底	+1.5	+1.2	+2.0
72 広汎な指導の困難	+1.2	+1.2	+0.6※	70 教師中心教育	+1.2	+0.5	+2.1

Tab. 5. e 学校勤務について

項 目	O 郡	M 市	M 町	項 目	O 郡	M 市	M 町
9 健康管理不備	+2.8	+1.8※	+3.1	34 カリキュラム作製過剰	+1.5	+1.6	+0.6※
35 校長の形式経営	+1.4	-0.2	+0.1	24 時間数過多	+3.2	+2.6	+3.5

d) 指導について

Ⅰ) O郡の傾向——矢張り不満苦悩が多いが、殊に漢字制限や新かなづかいに対する困難の度が多いのは、先の教員の資質(免許状)との関係に於て論ぜられよう。

Ⅱ) M町の傾向——指導に関しても、その困難度はより少いが、反面、その不徹底さを認める声が高い。

e) 学校勤務について

一般的に云つて何れの地域に於ても、教員の不足、持時間数の過多を訴えている。亦、設備面に於ても、山間地方は殊にその充実要望が強い。

f) 児童の知的生活について

Ⅰ) M市の傾向——児童に都会的色彩が濃い。即ち、児童の学力即ち、児童の学力低下は或程度防いでいるが、精神を集中して学習を行うことが少いことを嘆いている。が、学力の問題は、何を以て学力と為すかに種々問題が残されるから、寧ろ児童の実態よりも、教員の現実の教育は学力を低下させていないと云う認識の仕方がそこに示されたものと云うべきであらう。

Ⅱ) M町の傾向——こゝでは児童の実態に、より嘆きの声が聞かれる。学力低下を嘆き、学習意欲の欠如を憾み、その機智的処理の少なさを認めている。こゝに山村児と都会児との相違

点を認めると全時に、各地域の教育の現実の在り方に、その地域の特殊性に思いを致した教員自身の反省の資が潜んでいる様に思われる。

Tab. 5. f 児童の知的生活について

項 目	O 郡	M 市	M 町	項 目	O 郡	M 市	M 町
36 学 力 低 下	+1.5	+0.4※	+2.1	50 即 妙 処 理 能 力	+0.8	+0.8	+0.1※
87 精 神 集 中 不 可	+1.2	+1.8※	+1.2	21 学 習 意 欲 に 欠 け る	+1.6	+0.8	+2.4

Tab. 5. g 児童の社会的生活について

項 目	O 郡	M 市	M 町	項 目	O 郡	M 市	M 町
58 忍 耐 力 欠 如	+2.7※	+1.7	+2.0	88 生 意 気	+0.8	-0.1	+1.7
82 自 主 性 欠 如	+1.8	-0.1	+0.5	84 集 団 行 動 欠 如	+1.1	+1.3	+0.3※
13 利 己 的 で 勤 労 精 神 欠 如	+2.4	+1.2※	+2.8	46 礼 儀 紊 乱	+2.5※	+1.6	+1.2
23 素 直 さ 欠 如	+0.6	-0.1	+1.8				

Tab. 5. h 対社会関係について

項 目	O 郡	M 市	M 町	項 目	O 郡	M 市	M 町
24 社 会 が 教 師 の 人 間 性 否 定	+2.7※	+2.0	+1.8	66 学 校 へ の 批 判 多 し	+1.2	+1.3	+0.4※
22 父 兄 の 我 子 本 位	-----	+1.1	+2.7	14 世 論 向 上	+1.2	+1.5	-0.3※
29 父 兄 の 非 協 力	+1.7	+1.0※	+1.8	86 P T A 形 式 的	+2.1	+1.2	+2.7
74 義 務 教 育 過 長	+0.2	+1.2※	+0.3				

g) 児童の社会的生活について

M市では、児童の素直さや勤労精神が欠けているとは考えることは少ないが、他の二地域では、児童にかゝる素直さの欠如、生意気で、忍耐力がない等の訴えを持つ。之も勤労を背景とした山村の児童と都会の児童の違い、及び、之等の点を要望する教員の側の児童を評価する際に於ける観点の相違が見出されよう。

h) 対父兄関係について

一般的に云つて、山村地帯の方が、学校への父兄の干渉は少いが、その逆に非協力的で、PTAの運営も形式的に終ることが多いのが見られる。

以上、三地域の特殊性を見て来たが、「新教育理念」把握の様態に於けるよりも、その差異性がより明確になつて来た様であり、この理念が、現実にとの様な花を咲かせているか、それを実現する場合の抵抗の多寡等、地域的な条件が散見出来る。

(性差) 性的な差異に依る平均尺度値の相対的な位置づけは、その問題となるべき領域に従

Tab. 6 性 間 相 関

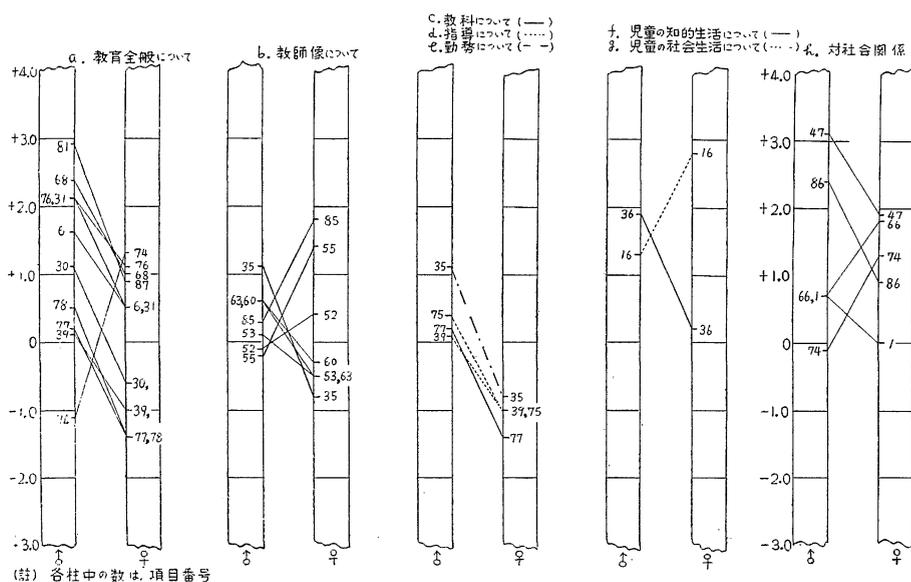
領 域	相 関	領 域	相 関
a. 教育全般について	+0.549	e. 学校勤務について	+0.842
b. 教師像について	+0.533	f. 児童の知的生活について	+0.608
c. 教科内容について	+0.876	g. 児童の社会的生活について	+0.793
d. 指導について	+0.764	h. 対社会関係について	+0.551

つて見るならば、教育全般の流れ、教師像についての認識度、対社会関係の在り方に相違が見られる他は、凡そ一致した傾向を持つと見られよう。(Tab.6) その絶対尺度値を見れば、(Fig.1)

a) 教育全般の傾向について (Fig.1.a)

全般的に云つて、男教師の方が之等の項目に対して正の方向を取るに比して、女教師の方がより消極的である。このことは、之等の項目から推して男教師が現実により不満を持ち、自己の理念との間の深溝をより認識しているに対し、女教師は現実への適応、それに即した生き方を為しつゝあるのが伺われる。之は、先の理念把握で考慮した男の理念性、女の現実性との対照に於ても首肯され得るだろう。

Fig. 1 性差の大きい項目



b) 教師像について (Fig. 1. b)

男教師よりも女教師の方が、より身近の問題に眼を注いでいる。即ち、教員間の競争意識、自分達の地位に対する人々の考え方の古さ等を、より自分の身近に感じている。

- c) 教科について }
 d) 指導について } (Fig. 1. c, d, f)
 e) 勤務について }

こゝでも、男教師が不満を積極的に示すに対し、女教師は、寧ろそれに対して否定的であり、現実を認めてかゝろうとする態度が見られる。

- f) 児童の知的生活について }
 g) 児童の社会的生活について } (Fig. 1. f, g)

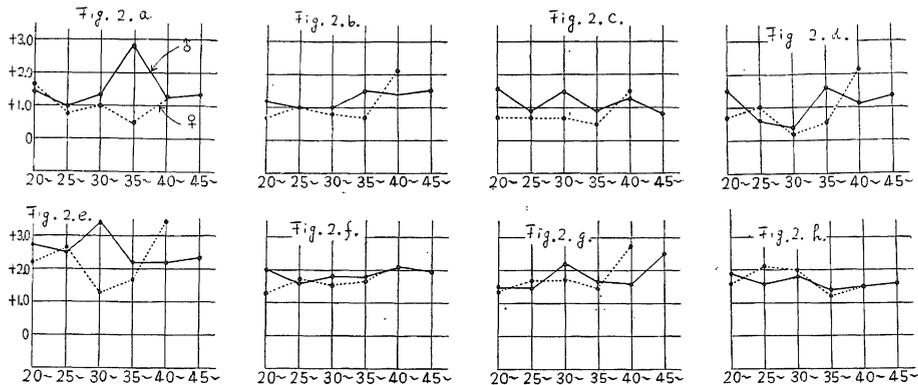
大きな差異は認められないが、男教師が児童の学力低下を嘆き、児童の男女差をもより認めようとする傾向があり、こゝでも、現状認識の仕方に男女教師の相違が見出される。

h) 対父兄関係 (Fig. 1. h)

男教師が、父兄との関係をより結んで行き、その協力体制を強く望んでいるに対し、女教師はその内部干渉、批判をより訴えている。こゝにもその態度の相違が見られるが、全般的に云つて、父兄の非協力を嘆いているのが、教員の悩みであると云える。

之等を通覧するに、こゝにも理念把握の時に見られた男女教員の態度が顔を出している。即ち、男教師がその理念性の故の不満を何れの問題領域に対しても明らかにしているに較べて、女教師は、現実への消極的態度、換言すれば身辺への関心、現実への適応の姿勢を示していると云えるであろう。

Fig. 2 全体尺度平均値



(年令層別) 先に我々は、全般傾向として年令の差異が、より之等の現実を、認識度を規定する要因として考えられるのではないかを記したが、今、之を更に分析してその姿を浮彫りにして見たい。

先づその年令の層化は先の研究と全様に五年を群として単位とした。各年令に於ける絶対尺度値の相対的位置づけを求め、各問題領域に従つて、他層との差異を明らかにしようと試みた。(Tab. 7)

Tab. 7 年令別項目比較 a 教育全般について

年令層		♂ (項目番号)	項目数	♀ (項目番号)	項目数
20 ~ 24	(+)	74	1		0
	(-)	30, 57	2	57	1
25 ~ 29	(+)		0		0
	(-)	76	1	40	1
30 ~ 34	(+)	62, 67	2	31, 71	2
	(-)	39	1		0
35 ~ 39	(+)	40, 69, 73	3		0
	(-)		0	31, 68	2
40 ~ 44	(+)		0		
	(-)	31	1		
45 ~	(+)	30, 31, 54, 57, 83	5		
	(-)	64, 73, 74, 78	4		

(註) (十) は他層より優位点 (一) は他層より劣位点

a) 教育全般について

全般的に云つて、この領域に於ては年代間に参差が烈しい。(Tab. 8, Fig. 2a) 意見の撒布が甚しいと云える。

I) 20~24——他層に比して、より現実の教育を戦前の教育に返すまいとするその教育観が伺われる。男女共に「日本精神の欠如」に痛痒を感じないこの世代の、教育の現実に対する観点を示している。

II) 25~29——この世代は、男女共に大きな特徴は示していない。何れも現実に対する大きな不満や悩みは少いと云えようか。

III) 30~34——この年代層は、前の二世帯と比較する時、その特徴が大きく浮び上つてくる。男女教師共に現実に対する不満は大きく、男教師にあつては、政治の教育への干涉の憂いや、教育への熱意は持てども、経済的条件がそれに伴わぬ憾みを述べ、女教師は、現実の米国直輸入教育や、人間を作り得ぬ現実の教育の場の不満をより強く訴えている。之等は、この世代の人々の教育観を示唆するものであり、教育の現状を見る眼に於ても、20代との間に一つの断層を形造る。少くとも戦前の教育を体験した世代と、そうでない世代との間の溝である。之も、理念把握の様態と関連して肯定され得る処である。

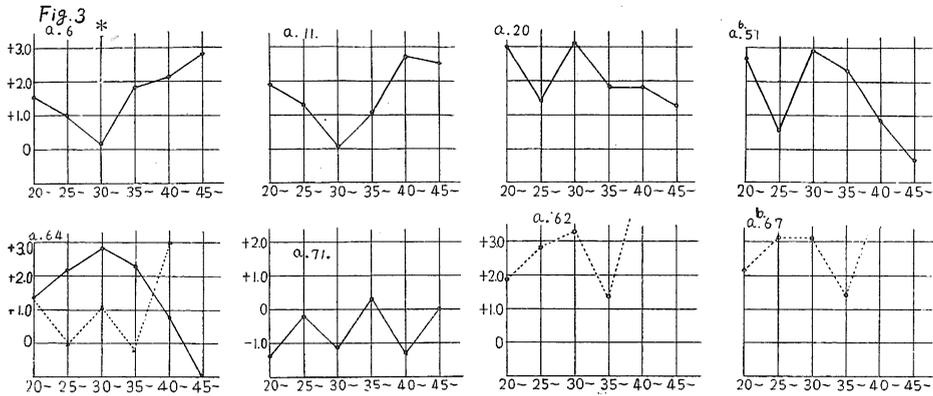
III) 35~39——この年代層は、男教師に於ては不満が多いが、女教師は寧ろその態度は消極的である。個性教育、自由教育の確立や、真面目な教員の声の報われる処少いのを認める男教師に対して、女教師は、現実を肯定しようとする方向に傾く。こゝにその態度に於て同年代の性差が見られる。

V) 40~44——この年代の問題として取上げるべき特殊性は殆んど見られない。但、この調査の対象として、この年令層の女教師は、1名であつたので、そしてその浮動が余りにも大きいので、この考察に於ては取扱わない。(以下全様)

VI) 45~——こゝでは他層に比して、現実に対する賛否の巾が烈しい。即ち、理念把握と全様に、賛成するものは大きく、否定するものも大きい態度が、こゝでも看取される。それは徒らに現実に不満をぶちまけるよりも、寧ろ、認めるべきは認め、反対すべきは反対すると云う傾向である。例えば、日本精神の等閑視及び戦前教育への溯及を指摘すると全時に、個性教育、自由教育は行われて居り、教員組織の封建性をも否定する傾向にある。この様に判然たる態度が見られる。

VII) 浮動の大なる項目——特に年令層別に分散度の烈しい項目を挙げれば Tab. 8 の如くなるが、その中、年令層別に於て考察した対象を除外して図示したのが Fig. 3 である。

Fig. 3 意見の拡がりの大きい項目 (年齢別)



この全般を通じて見られる特徴は、一つは、男女教師共の30~34の年代に於ての起伏の山、亦は谷であり、20代及び35~以上の世代との間に見られる現実評価態度の相違である。今一つは、之と対照的であるが、35~39の女教師が、現実に対して悩みの少いことである。換言するならば現実への適応の柔軟性が認められること。更にもう一つは、45~の層の絶対評価値が、最高点か、或は最低点の何れかに近く偏る傾向があることである。(Fig. 3-a)

之等は既に各年代層別に考察した結果と軌を一にしている。

Tab. 7. b 教師像について

年齢層		♂ (項目番号)	項目数	♀ (項目番号)	項目数
20 ~ 24	(+)		0		0
	(-)		0	26, 38, 60	3
25 ~ 29	(+)		0	70	1
	(-)	32	1		0
30 ~ 34	(+)	35, 59, 67	3	49	1
	(-)	10, 38, 63	3	35	1
35 ~ 39	(+)	60, 69	2		0
	(-)		0		0
40 ~ 44	(+)	53	1		
	(-)		0		
45 ~	(+)	26, 54, 55	3		
	(-)	49	1		

* a.6 は、a領域 (教育全般について) に属する第6項目 (教育が上つ調子) を意味する。
(以下同様)

b) 教師像について

全体の傾向から云うならば、年齢層間に大きな差異は見られない様だが、(Fig. 2. b) 個々に分析を企てるならば、相当の差異が見出せる。(Tab. 7, Tab. 8)

I) 20~24——男教師は特に取立て云うべき特性は見出されぬが、女教師は、教師の研究心、学識及び教育の在り方等に欠くる点には、多くを見ない。即ち、現在の教師像が打破さるべきであるとする積極性は、相対的に云つて低いと考えられる。こゝにも現状肯定の様相が見出される。

II) 25~29——特別に云うべきものも少ないが、男教師は教師の非民主化の傾向の少ないことを唱え、女教師は、教師の教師中心の教育が多いことを訴えていると云えよう。

III) 30~35——この層は、こゝでも現状に対する不満が強い。殊に男教師にあつてはその傾向が顕著であると云える。即ち、現在の教師は常識に乏しいとも事なかれ主義に陥つていても考えられないが自に対しては経済的苦慮と教育愛の問題を、他に対しては校長は形式的であり、教育に対する軽視の風潮を他層よりも、より認め不満としている。亦、女教師は、校長の形式主義はそれ程とも思えないが、教師の都会へ傾いた姿勢の悪さを認めている。

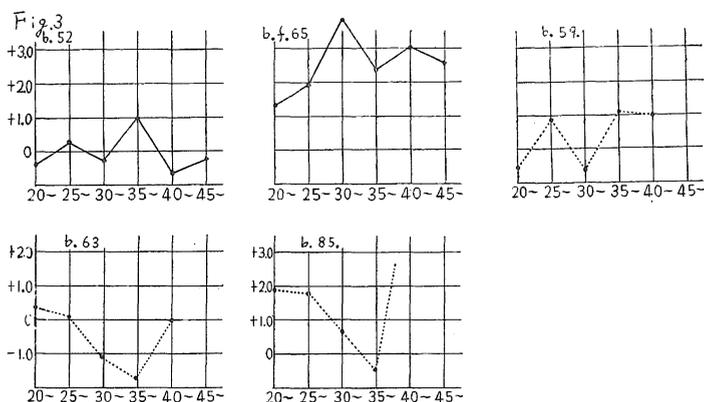
IV) 35~39——女教師には、他年代層に比して、問題点の指摘が少ないが、男教師にあつては各教師のひとりよがりや、まじめな教師の声の反映の少ないことを訴え、不満を露呈している。

V) 40~44——こゝでは問題が少ないが、教師の隋眠性を認めるのに、より積極性を示している。

VI) 45~——教員の研究心の不足、女教師の適応性を認め、教師の都会本位を否定する傾向を持つが、この態度も極めて明確である。

VII) 意見の浮動の多い項目 (Fig. 3. b) ——こゝで認められる特色は、矢張り、35~39の女教師に於ける現実容認度の大きさと、30~34の男教師の前後の世代と異つた認識度の存在である。

以上、全般的に教師像の認識の仕方に於ける各年代層の変遷を辿ると、30~34を一つのPeakとして、教師自身の問題点が指摘され、20~代は、現実教師像を不満少きものと認め、35~は同じ容認をするにしても、その態度に明晰なものが見られる。即ち、現実の教育の全般的な流れを見るにしても、教師像を見るにしても、その態度の在り方は、略、共通したものが見出されるのである。



- c) 教科内容について
 - d) 指導について
 - e) 学校勤務について
- } (Tab. 7. c, d, e)

之等を教師の仕事の問題として一括して取扱う。今、その総括的な傾向を見ると、教科内容に関しては、概ね各年代間の差異性は少いと考えられるが、その指導に対しては、男教師に30~34と35~39の世代に相違が見られ、亦、勤務校務等に関しては、男女の傾向に逆の傾向が伺われる。(Fig. 3. c, d, e)

I) 20~24—この年代は、問題とする処が少いが、唯、男教師が、新かなづかひや、漢字制限の指導に困難を訴えているのは、この世代の教師自身が学びとつて来た混乱を、そのままに伝えていくと云うことが出来るのであろうか。

II) 25~29—女教師が、他世代に比して広汎な指導に困難を示し、亦、健康管理設備の充

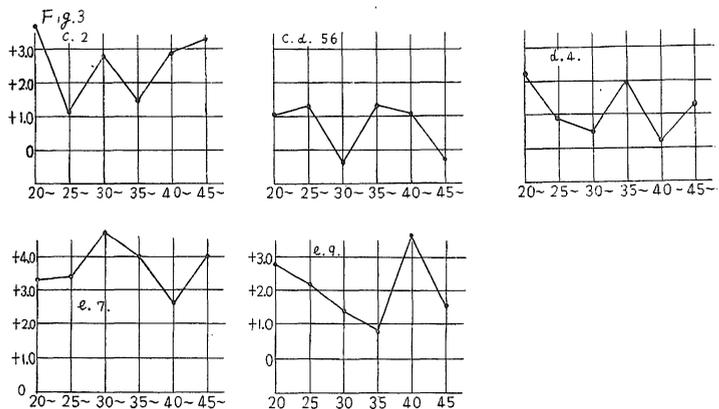
Tab. 7. c 教科内容について d 指導について e 勤務について

年齢層		♂ (項目番号)	項目数	♀ (項目番号)	項目数
20 ~ 24	(+)	<u>75</u>	1		0
	(-)		0		0
25 ~ 29	(+)		0	<u>72</u> , <u>9</u>	2
	(-)		0		0
30 ~ 34	(+)	<u>72</u> , <u>34</u> , <u>35</u>	3	5, 79	2
	(-)	<u>12</u> , <u>39</u> , <u>70</u>	3	56, <u>3</u> , <u>56</u> , <u>9</u> , <u>34</u> , <u>35</u>	6
35 ~ 39	(+)		0		0
	(-)	80	1	5, <u>18</u> , <u>7</u>	3
40 ~ 44	(+)		0		
	(-)	<u>34</u>	1		
45 ~	(+)	<u>3</u> , <u>24</u>	2		
	(-)	79, <u>34</u>	2		

(註) — は「指導について」の項目 = は「勤務について」の項目

実を求めているのが見られる。

III) 30~34—こゝでも男女教師共に、その問題点の多さを示している。男教師は、指導に関する問題は、広汎な指導の困難さを認める他は、大凡否定の方向にあるが、校務設備に関しては、不満とする処が多く露



呈されている。(Fig. 3. e も参照) 亦、女教師にあつては、指導や校務、設備、資料等につい

ては、寧ろ消極的な態度を見せるが、教科内容に関しては、学的体系の不整一に問題があるのではないが、地域教育の偏重、記憶問題の軽視をより戒めている。

Ⅲ) 35~39 —この年令層は、全体に亘つて他層よりも現実事態の認識に当つて容認看過の態度が見られる。即ち、児童評価や指導の困難さも、校務の繁雑さもその認識度は低い。

V) 40~44 —問題とする点は少い。唯、カリキュラム作製の過重が、他層の肯定的傾向に対し、寧ろ否定的である。

VI) 45~ —こゝでもこの年代層は、問題点が多く、記憶問題が軽視されているとは思えないが、児童の指導に関する迂遠さを認め、校務に関しても、教員の不足は確かだが、だからと云つて現実のカリキュラム作製が過重とは思えない等の、判然たる態度を持している様に思われる。

VII) 意見の浮動の多い項目 (Fig. 3. c, d, e) —教科及び学校勤務に関しては比較的年代層別に大きな浮動は少いが、その指導に当つて、より相違が示されている。(Tab. 8) 之は指導の問題が世代に依て認め方が違ふと云うことは、現実の事態がより振幅をはらんだ課題だと云えようか。

先にふれた様に男教師の30~34の Peak の問題は、こゝでも認められる。

全般的に云つて、教科的内容よりも、指導や勤務について不満や訴求が多く発せられていると云うことが出来る。

Tab. 7. f 児童の知的生活について g 児童の社会的生活について

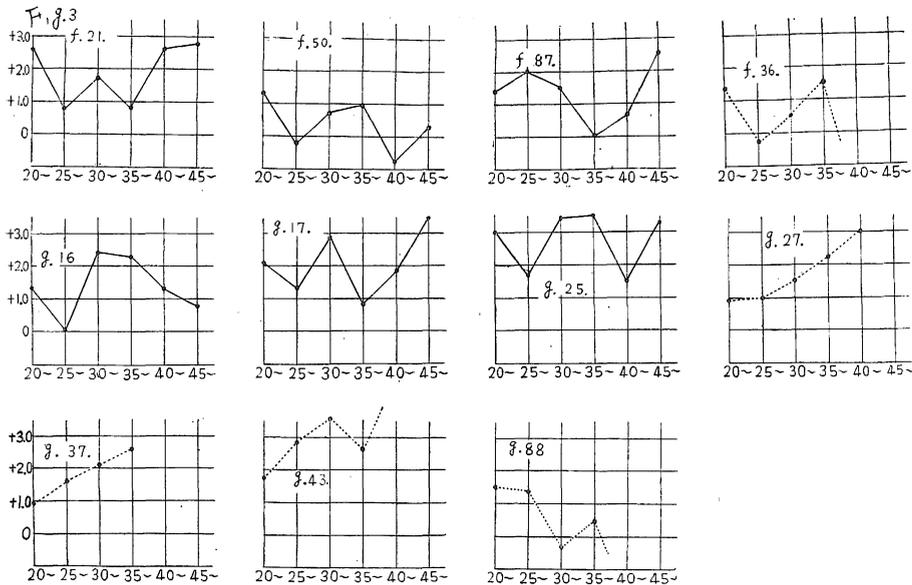
年令層		♂ (項目番号)	項目数	♀ (項目番号)	項目数
20 ~ 24	(+)		0	<u>82</u>	1
	(-)		0	87, <u>15</u>	2
25 ~ 29	(+)		0	87	1
	(-)	<u>19</u>	1		0
30 ~ 34	(+)		0	<u>84</u>	1
	(-)	36, 44	2	50	1
35 ~ 39	(+)		0		0
	(-)	48, <u>84</u>	2	<u>84</u>	1
40 ~ 44	(+)		0		
	(-)	<u>43</u> , <u>82</u> , <u>88</u>	3		
45 ~	(+)	<u>23</u> , <u>82</u> , <u>88</u>	3		
	(-)		0		

(註) — は「その社会生活について」の項目

f) 児童の知的生活について

g) 児童の社会的生活について

児童生活をどの様に教師が眺めているかの観点からこの両者をこゝで纏めて取扱う。全体として云えることは、男女年令間に大差を認めることは出来ない (Fig. 2. f, g) が、個々に至る



認識度には差異性が望見される。(Tab. 7. f, g ; Tab. 8)

I) 20~24——女教師が、特に児童の自主的な行動面に否定的な態度を示しているのが見られるが、男教師は、その社会生活、知的生活共に問題とする処が少い。

II) 25~29——男教師は、子供の明るさを認めるのに消極的だが、女教師はその自主的行動をより認めようとする。

III) 30~34——男教師は、児童の知的生活に於て、都会、山村を問わずその学力が低下していないことを認めているが、女教師は、児童の集団行動欠如を取上げ、亦、児童の処理能力を認めない傾向を有する。之は、この年齢層が児童を肯定的な面に於て捉えるか、否定的な面に於て捉えるかの男女教師の態度の相違だろうか。勿論、之は男教師は男教師中に於ける相対的位置がかかるものであり、女教師も、その年齢間の相対的位置から、この様なことが云えるのであるから、直接の比較は出来ないが。

III) 35~39——男女共に、児童の集団行動の欠如を認めない傾向が多い。亦、男教師は、知的生活に於ける児童の理論性を認める度が強い。この年代には、児童生活に対して現実容認の態度が出ている。

V) 40~44——殊に児童の社会的生活に対して、提出された項目に対する消極的な傾向、即ち、児童の現況に欠点や不満を見出すことが少い現実容認の態度が見られる。

VI) 45~——こゝでは、40~44の年代とは逆に、児童の現状を不満とする傾向が強い。即ち児童が素直さに欠け、自主性にもとることを主張している。

VII) 意見の浮動の多い項目 (Fig. f. g) —— 児童生活を見る眼は項目に依て区々であることが多いことが全般に知られるが、(Tab. 8) こゝで特に考えられるのは男女共に 25~29 に見

られる之等の項目に対する消極性である。之等を分析すると児童が良いと思われているのはその社会的生活（項目17, 25）であるに対し、悪いと認められているのは主としてその知的生活（項目21, 50, 87）である。之に対し、30~34代は、それと対照的存在として考えられ（Fig. 3. f, g参照）児童を見る態度にも一つの断層が、この両年代層間に横たわる。亦、児童の落つきのかなさと、女生徒の奥ゆかしさのなさの指摘は、年代が進むに従つてその度合は強くなつてゐる。

h) 対社会関係、殊に父兄関係について (Tab. 7. h)

全体から云つてその平均尺度値は、男女共に年令間に差異は少いと云えるが、(Fig 2. h) 個々に至つて見るならば、こゝにも若干の撒布がある。

I) 20~24——男教師は義務教育過長に依る父兄負担を憂うが、女教師は父兄との結びつきが建設的ではないと考える。

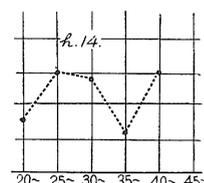
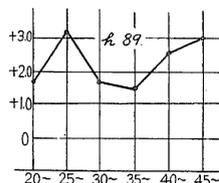
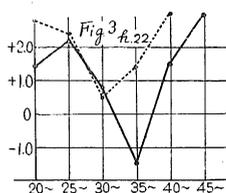
II) 25~29——殊に問題とすべき点は見当らぬが、女教師は学業成績偏重要望の父兄の声が高すぎるとしている。

III) 30~34——男女教師共に父兄に対して批判的である。即ち、男教師はその干渉の多さに於て、逆に女教師はその無関心に於て、共に父兄の協力的態度を他層よりも要請している。

Tab. 7. h 対社会関係について

年令層		♂ (項目番号)	項目数	♀ (項目番号)	項目数
20 ~ 24	(+)	74	1		0
	(-)		0	1	1
25 ~ 29	(+)		0	89	1
	(-)		0		0
30 ~ 34	(+)	66	1	47	0
	(-)		0		0
35 ~ 39	(+)		0		0
	(-)	22	1	42	1
40 ~ 44	(+)		0		
	(-)		0		
45 ~	(+)		0		
	(-)	1	1		

III) 35~39——この世代は30~34層とは逆に父兄・社会との関係の現況を容認している度合が強い。即ち男教師は、父兄が我子のこ



とを願みているとは思わず、亦、女教師にあつては、教師の人間性無視がさ程とも考えられていない。

V) 40~44——問題とさるべき点は相対的に殆んど認められていない。

VI) 45～ —父兄との結びつきが積極性を欠くことを認める傾向が存する。

VII) 意見の浮動の多い項目 (Fig3. h) —ここに於ては、全般的に浮動は少いが、こゝでも男女共25～29の之等の項目に対する肯定傾向のPeakが目立つ。それを分析して見ると、大体に於て父兄の態度に不満を抱いている。(項目22, 89)之は共に30～39の世代が、その反対の評価を下しているのと対照的に考えられる。

之等を通覧するに、対社会・父兄関係は年代を問わず不満を持つていると考えられようか。

Tab. 8 意見の浮動の大なる項目 (年令別)

	♂ (項目番号)	項目数	♀ (項目番号)	項目数
a. 教育全般について	6, 11, 20, 30, 39, 40, 51, 57, 64, 71, 73, 74, 76, 78	14	31, 62, 64, 67, 71	5
b. 教師像について	10, 26, 32, 49, 51, 53, 60, 63, 65	9	35, 49, 59, 63, 67, 85	6
c. 教科内容について	2, 56, 80	3	5	1
d. 指導について	3, 4, 12, 39, 56	5	3, 18	2
e. 学校勤務について	7, 9, 24, 34	4	9	1
f. 児童の知的生活について	21, 48, 50, 65, 87	5	36, 87	2
g. 児童の社会的生活について	16, 17, 23, 25, 82, 84, 88	7	27, 37, 43, 84, 88	5
h. 対社会関係について	22, 74, 89	3	14, 22, 47, 89	4

§4. 要約. 及び考察

我々は、教師が教育の現実をどの様に眺めているかを、その地域、性別、年令層の見地から眺めて来たが、小径、迂余曲折にして未だ分析され尽されずの感が深い。が、この限りに於て摘出せられた主な点を要約して見ると、

1) 全般的に云つて、教育の現状は設備、教材、参考資料等の不備を訴えているが、他方、この中にあつても、新教育が必ずしも人間を骨抜きにするものでなく、その理念を貫かむとしているのが認められる。

2) その地域的な差異性から云えば、都市部と山間部との辺地教育に対する認識度や要請の相違、之と関連して教員の資質、資格の差別待遇の問題、児童への求めるものや児童観の違い等、即ち、山村部により訴求すること、問題とする点が多いがその反面、教師自身の態度を顧みるならば、山村部の方が、より安住無慮の事なかれ主義の中に住まう姿が伺える。之は閉された世界に於ての通弊としての現実順応の姿であろう。

3) 男女教師の相違点では、理念把握の態度に見られた如く、男教師が教育の現状に、より多くの不満を持ち、その理想性とのgapを認識しているに対し、女教師は現実への疑惑少く、現実を容認し、それへの適応を為しつつある様に、教育現況の認識度に於ても、男の理想性、女の現実性が見られる。

4) 年令差は、全体の傾向から云つて地域性の要因よりも、より認識態度を決するものとし

て考えられるのだが、こゝで各年齢層に簡単な俯瞰を与えて見るならば、次の様なことが云えよう。

a) 20~24: 現実容認の態度が他層より強いが、之は比較すべき戦前を持たぬ世代の、現実を肯定し、それに足を踏まえて行こうとする如き疑問、不満の少なさと云うことが出来ようか。

b) 25~29: こゝでも一般的に云つて30~34層との断層が見られる。

c) 30~34: 現実に最も多く不満を抱き、疑問を提出している年代である。教育界の中堅として、教育へ熱意を持って持つ程、現実との阻礙に苦悩する姿とも考えられよう。

d) 35~39——特に女教師にあつては、現実容認の態度が見られ、現実に対する問題点の少なさが見られる。之は、その教育実践上の安住や、教育観の甘さとも関連していると云えないだろうか。

e) 40~44——殊に取上げるべき特殊性は見出されていない。

f) 45~ ——理念把握の態度と全様に、肯定、否定の態度が明確である。

以上、年代層別にその教育の現況認識態度の特異性を見て来た。勿論、之に依る単純な世代論は排撃すべきであり、個々人に迄還元して考察するならば、もつと種々相が浮彫りにされると思われるが、こゝでも凡その傾向が伺えると云うことが出来よう。

5) 全体的に云つてその問題領域では、教育全般の傾向や、教師像及び児童生活に関するものに差異が多く認められ、対社会・父兄関係には性差がある。

以上、教師の現況認識の傾向を夫々差別的に把握して来たが、こゝに見られた疑問や不満に対してどの様な「意見」が寄せられるか。それとの関連に於て教育に対する教師の態度、その特殊性が総合的に理解され得るであろう。